

ホルモン

Q&A

Q1

自律神経失調症の既往と GnRH アゴニストの副作用の関係を教えてください。

〈回答〉

福島県立医科大学産科婦人科学講座 山口 明子

福島県立医科大学ふくしまこども女性医療支援センターセンター長 水沼 英樹

A1

自律神経失調症とは、一般に種々の身体的自律神経性愁訴をもち、しかもこれに見合うだけの器質的変化がなく、原因も不明であり自律神経機能失調に基づくと思われる一連の病態とされる¹⁾。症状は多彩であり、頭痛、めまい、疲労感、不眠、ふるえ、四肢冷感、発汗異常、動悸、息切れ、胸部圧迫感、胸痛、食欲不振、胃部膨満感、便秘、下痢などが挙げられる。男性より女性に多いとされ、性ホルモンが関連すると考えられている。また、更年期障害においても、血管運動神経症状(のぼせ、発汗、冷え、動悸)や胸部症状(胸痛、息苦しさ)をはじめ、疲労感、頭痛、肩こり、めまいなどは自律神経失調症様症状に分類されており²⁾、更年期障害自体を更年期に起こる自律神経失調症とする考え方もある³⁾。

性腺刺激ホルモン放出ホルモン(gonadotropin releasing hormone : GnRH)アゴニスト(GnRHa)は低エストロゲン血症を誘引し、子宮筋腫・子宮内膜症・子宮腺筋症に対して、月経困難症の改善や病巣の縮小効果をもつが、時に低エストロゲン状態による副作用が問題となる。骨塩量の減少に加え、自覚症状としてはホットフラッシュや発汗異常を中心とした血管運動症状、腔乾燥感、睡眠障害、うつ傾向、記憶障害などがあり、治療の継続やコンプライアンスに大きく影響することがある。少量のエストロゲン投与を行う add-back 療法などがこれらの症状を改善するとされている⁴⁾。

この Q1 の意図するところは、自律神経失調症の既往のある女性において GnRHa 投与はどのような影響をもたらすか、ということと考えられるが、自律神経失調症のある女性へ GnRHa を直接投与しその影響をみた研究は、現在のところみられない。そこで、GnRHa 療法を受けた症例で治療終了後長期的に経過を観察した報告から、この問題を推測してみることとした。まず、思春期の子宮内膜症患者を対象に行われた研究では、add-back 療法を行っても 96% の患者で治療中のエストロゲン欠落症状が認められ、治療終了後半年以上経過しても 80% の患者で症状が残り、45% の患者はこれらの症状を非可逆的と捉えていた(しかしながら、この研究の対象者たちは副作用にもかかわらず、子宮内膜症の痛みに対する治療として GnRHa